

## 「多文化空間」における保育運動

——新宿区大久保の A 保育園を通して——

立教大学 大野光子

### 1 目的

新宿区は、東京都のなかで最も外国人人口が多く、割合も高い地域である。そして、JR 新大久保駅を中心として隣接した地域に、全体の約 3 分の 1 に当たる外国人が集中して居住している。街を歩くと、各国の食材店、飲食店が立ち並び、韓国系キリスト教会や、イスラム教モスクの存在も確認できる。そして、近年では、韓国人専用の不動産会社や母国への送金サービスを専門におこなう業者も見られるようになった。

このように、大久保地域では外国人の生活圏の形成が確認できる一方で、新宿区の外国人の新規登録人口と閉鎖人口のデータをみると、2000 年から毎年、約 1 万人の出入りがあることが分かる。これは、外国人登録者数全体でみると、毎年約 3 分の 1 が入れ替わっているということだ。また、居住年数別人口割合のデータをみると、全体の 7 割が 5 年未満の短期滞在者で、その中でも 1~3 年未満の人口が最も多く、全体の半数弱を占めているということが示されている。

以上のようなことから、新宿区は、外国人が定住するエスニック・タウンとしての様相を呈する一方で、非常に流動化の激しい地域であるということが指摘できる。

本報告では、このような新宿区大久保において 24 時間保育をおこなう、A 保育園の認可獲得運動に焦点を当て、A 保育園の特性、大久保という地域の特性を浮かび上がらせることを目的とする。またそこから、なぜ大久保を「多文化空間」と呼ぶことができるのかについて、考察をおこなう。

### 2 方法

上述のような目的を達成するため、本報告では、A 保育園の認可獲得運動を 1960 年代~1970 年代に大都市郊外部で展開された保育園不足問題に対する住民運動史のなかに位置付ける（例えば、浦辺, 1969; 橋本, 2006）。

A 保育園の運動の実践については、当時、運動の主体となった園長を始めとする保育園スタッフ、父母会、地域住民に対する聞き取り調査を主として明らかにする。聞き取りは、半構造化形式でおこなう。この他、運動の際に使用されたチラシや当時の記録を分析対象の資料として使用する。

### 3 結果・結論

A 保育園の始まりは、1983 年に新宿の職安通りにあるビルの一室の無認可の夜間保育所だ。1990 年に、現在の場所に土地を購入し、認可基準にかなう新園舎が落成するまでの保育園の発展は、夜間保育を求める親たちの強い要望と援助のたまものであると見てよい。

その後、1996 年頃からスタッフ、父母会、地域住民を巻き込んだの本格的な認可運動が始まった。そして、2001 年に A 保育園は、東京都ではじめての夜間の認可保育園として認められた。

A 保育園からみた新宿区大久保は、医師や官僚などのエリート層、一般企業のサラリーマン、深夜のサービス労働者という、多様なひとびとが生活を営む地域である。そして、地域には、流動層と定着層という 2 つのタイプの外国人居住者が存在し「多文化空間」としての様相を呈している。このような多様なひとびとが「夜間、深夜の保育」という共通のニーズを持ち、A 保育園を利用しているのだ。そして、ここで展開された保育運動は、行政の政策変更を可能にした。

### 文献

浦辺史, 1969, 『日本保育運動史』風媒社会。

橋本宏子, 2006, 『戦後保育所づくりの運動史—「ポストの数ほど保育所を」の時代』ひとなる書房。